

## 工業高校インターンシップの展開と特徴 —受け入れ事業所の具体的な展開事例を通して—

Process and Characteristics of Internship in Technical High School

永田 萬享

Kazuyuki NAGATA

技術教育講座

結城 利章

Toshiaki YUUKI

福岡工業大学付属城東高校講師

(平成15年9月8日受理)

### 1. はじめに

従来、学校教育といえは学校内の教育活動のみ教育の営みを限定することに我々はこれまであまり違和感を抱いて来なかったのではないかと思われる。とりわけ日本にはこの傾向は根強く、学校教育の屋台骨に深く浸透していた。この問題は一般普通教育と職業教育との関係になぞらえることができる。日本の学校教育制度における一般普通教育の過剰傾向、つまり後期中等教育段階における普通科在籍生徒数の多さに比して職業科のその低さが証明している<sup>1)</sup>。

しかし、90年代の経済不況のもと、雇用慣行のドラスティックな変容がすすんでいる。就業体験活動やインターンシップといった学校外世界を学びの世界に引き込む潮流は確実に日本の教育界をとらえ始めている。兵庫県の中学校で始まった「トライやるウィーク」をきっかけに就業体験がひろまり、今や中学校にとどまらず、高校、大学、高専、専門学校等々あらゆる教育機関でこの種の体験活動が行われている。大学ではインターンシップと称して単位化しているところは決して珍しくはなくなっており、こうした動きは最近とみに顕著にさえなっている。

そこで本研究では、高校、とりわけ工業高校にしぼって、インターンシップの展開状況とその今日の特徴について実証的に分析検討を加えてみたい。今日、工業高校で導入され、実施されているインターンシップについて、学校側はどのような目的で導入したのか。どのような準備のもとにどのように実施したのかを丹念に分析することが求められる。それに参加した生徒は何を学び、逆に何を学ばなかったのか。そしてそのことを学校

側はどのように受け止めたのか。こうした一連の分析によって、学校側はインターンシップの現状をどのようにとらえているのかを考察することができる。これが第1の課題である。

第2の課題はインターンシップの成功の鍵を握っているといつてよいであろう生徒を受け入れる側の対応にメスをいれることである。この点は学校側のインターンシップの取り組み以上に、事業所側のそれはより緊急かつ重要な問題をはらんでいるからである。企業の社会的存在意義は教育の成果・効果に最大限の価値をおく学校とはこの点において決定的に位相を異にする。こうした点をふまえるならば、事業所がインターンシップをどのようにとらえているのかを考察することは欠かすことのできない重要な視点を有していると思われる。企業はどのような考えで受け入れをしているのか、そして生徒は事業所内の職場でどのような作業に従事しているのか、さらに生徒はその労働現場でいかなる体験をしたのかそして何を学んだのか、事業所はそうした生徒の実態をとおしてこのインターンシップに何を期待しているのか、否か等々を分析することによって、企業側がどのようにインターンシップを捉えているのかを考察できるであろう。

第3に、以上の点をふまえてはじめて、学校側と企業側のそれぞれの思いがどのように交錯し、からみあっているのか、などインターンシップの展開にみる今日の特徴をつかむことが可能となる。言い換えれば、学校側がインターンシップにどのように取り組んだのか、そして企業側はどのように関わってきたのか、社会的存在意義の異なる各々機関の立場から分析したうえで、トータルに捉える視点がここでは求められる。

## II. 高校インターンシップの実施状況

### 1 全国の高校インターンシップ

高校インターンシップは1990年代後半以降、急速に導入されてくる。1997年「変革と創造のための行動計画」が閣議決定され、政策的導入の端緒を切る。そこでは、労働省、文部省、通商産業省の3省が連携してインターンシップをめぐる問題の検討を行うと同時にバランスある発展の在り方について、そして関係者間の共通認識を目指す決定が行われた。

一方、文部科学省の諮問機関である中央教育審議会では、青少年の社会的な体験の不足からくる弊害や社会的な進路選択能力の育成について種々議論がなされた。これらの議論は「教育改革プログラム」として具体化されることになる。学習指導要領には、インターンシップは中学校、高校の特別活動の指導を充実させる重要な方法の一つとして強調されている<sup>2)</sup>。

そうした中で高校におけるインターンシップの導入が積極的にはかられ、インターンシップ実施高校が増加する。文部科学省の「高等学校教育の改革における推進状況報告」によると表1のように2001(平成13)年度のインターンシップ実施状況は高校(公立)全体で約4割弱にのぼる。学科別にみると「普通科」が22%と低いのが目立つ一方、いわゆる職業学科では「福祉」(90%)や「看護」(87%)をはじめとして、「水産」(80%)「農業」(74%)「工業」(74%)などのように多くの高校・職業学科で導入・実施されていることがわかる。しかもその導入・実施率は急速に増加していることも注目しなければならない。たとえば、工業高校については1997(平成9)年度が15%であったが、2001(平成13)年度には

74%と上昇している。

### 2 福岡県の高校インターンシップ

福岡県におけるインターンシップには県立高校110校のうち1999(平成11)年度が32校、3,196人、2000(平成12)年度が54校、5,229人が参加している。2001(平成13)年度には55校、4,663人となっている。福岡県教育委員会では1999(平成11)年度から高校インターンシップに積極的に取り組み始めた。1999(平成11)年度には調査指定校として5校を委嘱して、調査研究が行われた。表2は福岡県における工業高校のインターンシップ実施状況を実施学年、選択・必修別、実施時期、実施期間別にみたものである。実施学年では3学年が4校と少なく、2学年が9校と2学年を対象としているところが多い。選択・必修別でみると、希望する生徒に実施する高校は4校と少なく、希望の有無に関わらず全員対象に行う高校が8校と多い。実施時期はすべて夏休み期間中となっている。実施期間としては3～5日間のように、1週間以内である。

## III. 工業高校インターンシップ実施の事例分析

### 1 学校概要

今回、調査の対象とした大川工業高校、八女工業高校、三池工業高校、田川工業高校(以下、高校は省略)の学校概要を表3に示す。いずれの工業高校においても創立は古く、伝統のある地域に根ざした工業高校だといってよい。学校規模は八女工業が電子機械科、電気科、自動車科、土木科、情報技術科、工業化学科の6学科874名と最も多く、次いで三池工業が電子機械科、電気科、情報電子科、土木科、工業化学科の5学科818

表1 高等学校(公立)の学科別インターンシップ実施状況

(%)

	農業	工業	商業	水産	家庭	看護	情報	福祉	その他の職業に関する学科	小計	普通科	その他の学科	総合学科	全体
1997(平成9)年	44	14.6	26.4	29.3	56.1	-	-	-	-	28.2	-	-	-	-
1998(平成10)年	60.7	27.6	31.1	49	41	100	-	-	-	40.3	5.7	-	37.8	20.9
1999(平成11)年	62.7	43.3	39.8	44.7	48.8	100	-	-	27.6	47.7	7.4	1.2	43	22.7
2000(平成12)年	75.1	59.9	53	73.5	49.1	100	-	82.6	57.9	60.9	14.6	4.4	64.2	31.9
2001(平成13)年	73.6	73.5	62.4	80.4	53.7	86.9	0	89.5	88.9	67.8	21.7	7.8	69.1	38.9

出所) 文部科学省「高等学校教育の改革における推進状況報告」

表2 福岡県における工業高校インターンシップ実施状況

2001(平成13)年度					
工校名	浮羽	香椎	嘉穂	苅田	小倉
就業体験	3年	3年	3年	2年	2年
	全員	全員	全員	全員	全員
	夏休み期間中 3日間	夏休み期間中	夏休み期間中	学校裁量時間 5日間	夏休み期間中

工校名	筑豊	戸畑	福岡	三池	八幡
就業体験	未調査	2年	2年、3年	2年	未調査
		希望	希望	希望	
		夏休み期間中 3日以上	夏休み期間中	夏休み期間中	

工校名	博多(市立)	大川	八女	田川
就業体験	2年	2年	2年	2年
	全員	全員	全員	全員
	夏休み期間中	夏休み期間中	夏休み期間中	夏休み期間中
	5日間	3~5日間	5日間	

表3 調査対象工業高校の学校概要

	大川工業高校				八女工業高校				三池工業高校				田川工業高校			
	1921年(大正10年)				1920年(大正9年)				1888年(明治41年)				1936年(昭和11年)			
創立	学年定員	1年	2年	3年	平成14年度 在籍生徒数	1年	2年	3年	平成14年度 在籍生徒数	1年	2年	3年	平成13年度 在籍生徒数	1年	2年	3年
設置学科	インテリア科	40名	40名	40名	電子機械科	40名	40名	79名	電子機械科	80名	76名	85名	建築科	45名	35名	45名
	建築科	40名	40名	40名	電気科	41名	38名	39名	電気科	81名	82名	77名	インテリア科	40名	35名	39名
	機械科	40名	40名	40名	自動車科	40名	40名	40名	情報電子科	40名	40名	39名	電気科	38名	37名	36名
					土木科	80名	81名	78名	土木科	42名	37名	37名	機械科	43名	77名	66名
					情報技術科	40名	39名	41名	工業化学科	40名	39名	33名				
				工業化学科	40名	40名	38名									
平成14年度学年生徒数	119名	112名	102名		281名	278名	315名		283名	274名	261名		166名	184名	186名	
平成14年度全生徒数	333名				374名				818名				536名			
進路状況	平成13年度 実績	進学	20%		平成13年度 実績	進学	29%		平成13年度 実績	進学	30%		平成12年度 実績	進学	27%	
		就職(県内)	55%			就職(県内)	46%			就職(県内)	29%			就職(県内)	26%	
		就職(県外)	16%			就職(県外)	25%			就職(県外)	31%			就職(県外)	20%	
		その他	9%			その他	1%			その他	10%			その他	27%	

出所) 聴取り調査により作成

名、田川工業が建築科、インテリア科、電気科、機械科の4学科536名、大川工業がインテリア科、建築科、機械科の3学科333名となっている。

卒業生の進路状況は4校とも卒業生の2割から3割程度が進学(専門学校含む)、残りの生徒は就職もしくは未定者である。就職者は大川工業、八

女工業が7割と多いが、三池工業6割、田川工業5割というように少ない。就職における県内、県外の比率は大川工業、八女工業では5割程度が県内、三池工業、田川工業では3割程度が県内へ就職している。このことから、大川工業と八女工業は比較的、地域の企業・事業所との繋がりが強いといえる。一方、三池工業、田川工業は旧産炭地

表4 インターンシップの導入目的

工業高校名	導入目的
大川工業高校	1. 日ごろの学習において習得した専門知識などを就業体験を通して実際に活用し、総合的に理解する。 2. 事前指導で学習したことを就業体験を通して実践し、とくに言葉遣い、マナーなどの応対に対する基礎・基本的な知識を習得する。 3. 職場就業体験を通して業務を能率的・合理的に処理する能力を養うこと。 4. 将来の自己の進路における、職業・職場の適性について理解を深めること。
八女工業高校	生徒が在学中に将来の生き方や進路を考える上で、産業や職業の現場を知るために就業体験をする。
三池工業高校	職場の現場における実際的な知識や技術・技能に触れることにより、学校における学習と職業の関係について、生徒の理解を促進し、学習意欲を喚起させる。また、生徒が自己の職業適性や将来設計について考える機会となり、主体的な職業選択の能力や将来設計について考える機会となり、主体的な職業選択の能力や高い職業意識の育成を促進させる。さらに、インターシップの場合は、生徒が教員や保護者以外の大人と接する貴重な機会となり、学校と地域との交流を深める。
田川工業高校	①就業体験を通して、高い職業意識を育成する。 ②進歩している産業現場で新しい技術に触れさせる。 ③就業体験を通して学習意欲を喚起させる。

出所) 各工業高校提供資料及び聴取り調査により作成

に立地しているため景気低迷の影響をより強く受けており、大川工業、八女工業に比べて県内への就職率は低い。さらに、4校いずれの工業高校においても県外への就職率は2割から3割程度になっており、近年の就職の困難さを示唆するものとなっている。

また、八女工業を除く3校では進路未定者(就職浪人生)が1割から2割と多く、とりわけ田川工業のように3割もいるという現状を見逃すことはできない。進路がある程度確保されていたこれまでの工業高校の進路実態と比べて、深刻な様相を呈しているといえよう。

## 2 インターンシップの導入目的

表4は4校のインターンシップ導入の目的を示している。いずれの工業高校においても共通して

いることは、「高い就業意識の育成」と「職業選択能力の育成」が掲げられており、インターンシップに高い職業観と勤労観の育成が期待されていることがわかる。学校毎の特徴をみると、①大川工業では、事前指導で行う挨拶指導の現場での実践を目標としており、社会人としての資質向上を重視している。②三池工業では、地域と学校との交流を深めるために、地域に密着したインターンシップを目指している。③田川工業では、産業現場の新しい技術に触れさせ、専門分野への興味・関心を高め、学習意欲を喚起させることが設定されている。

## 3 インターンシップ実施状況

インターンシップの実施状況を見たものが表5である。①まず、インターンシップの導入年度

表5 インターンシップの実施状況

工校名	大川工業	八女工業	三池工業	田川工業
導入年度	1999(平成11)年度	2000(平成12)年度	2000(平成12)年度	2001(平成13)年度
実施形態	2年生の全員	2年生の全員	2年生の希望者	2年生と3年生の全員
対象学年	2年	2年	2年	2年、3年
対象生徒数	112名	278名	261名	320名
参加生徒数	112名	278名	43名	20名
期間	7/22~8/31	8/2~5	7/23~8/29	7/22・31
日数	3日~5日間	5日間	3日~5日間	1日~4日間
インターンシップ実行委員会構成	教頭、教務主任、科主任、2年学年主任、2年担任	校長、教頭、事務長、科主任、2年学年主任、2年担任	教頭、教務主任、科主任、2年学年主任、2年担任	教頭、教務主任、各科より教員2名ずつ
受け入れ事業所の開拓対象	・卒業生が就労している事業所 ・採用が来た事業所 ・生徒が希望する事業所 ・教員との繋がりがある事業所	・卒業生が就労している事業所 ・採用が来た事業所 ・生徒が希望する事業所 ・教員との繋がりがある事業所	・卒業生が就労している事業所 ・採用が来た事業所 ・生徒が希望する事業所 ・教員との繋がりがある事業所	・卒業生が就労している事業所 ・採用が来た事業所 ・生徒が希望する事業所 ・教員との繋がりがある事業所
受け入れ事業所の開拓方法	・電話で連絡を取り事業所を訪問する ・地域の商工会議所への告知	・電話で連絡を取り事業所を訪問する ・地域の商工会議所への告知	・電話で連絡を取り事業所を訪問する	・電話で連絡を取り事業所を訪問する
受け入れ事業所の開拓の時期	5月連休明け	前年度9月より	5月連休明け	5月連休明け

出所) 各工業高校提供資料及び聴取り調査により作成

表6 三池工業高校のインターンシップ実施状況

2001(平成13)年度				
学 科	会社名	参加人数	期日	日数
電子機械科	ニッテク有明	1名	8.22～24	3
	大坪鉄工	1名	8.23～25	3
	有明技研	2名	8.22～24	3
	大坪鉄工	2名	7.23～25	3
	近鉄エンジニアリング 福岡支社	2名	8.22～24	3
	三井金属九州機工	2名	7.23～25	3
	竹下産業	2名	8.22～24	3
	センレイ工業 福岡工場	1名	7.23～25	3
電気科	九州電力 大牟田電力所	4名	8.27～29	3
	九州電気保安協会 柳川事業所	4名	8.27～29	3
	九州電力 港発電所	2名	8.20～23	4
	ベスト電器 大牟田北店	2名	8.27～29	3
情報電子科	九州電力 大牟田電力所	2名	8.27～29	3
	有限会社 ヨシダ	2名	7.23～26	4
	平井精密工業 熊本事業所	2名	7.23～25	3
土木科	片山鉄骨	2名	7.23～27	5
	三井道路	4名	7.24～27	4
工業化学科	三井化学 大牟田工場	2名	7.24～27	4
	電気化学工業 大牟田工場	2名	7.23～26	4
	山本化成 大牟田工場	1名	7.24～27	4
	荒尾競馬場 (福島幸広厩舎)	1名	7.24～28	4
	荒尾競馬場 (崎谷厩舎)	1名	8.24～28	4

出所) 三池工業高校提供資料

は、大川工業が1999(平成11)年度、八女工業と三池工業が2000(平成12)年度、田川工業が2001(平成13)年度となっている。いずれも、2～3年前から導入されている。②参加スタイルは、大川工業と八女工業が2年生の全員で実施しているのに対して、三池工業は2年生の希望者、田川工業は2年生と3年生の希望者で実施している。③実施時期はいずれの工業高校においても夏季休業中に行われており、平常授業を割いたインターンシップの実施ではない。④実施日数は八女工業のみが5日間であるが、大川工業、三池工業では3～5日間、田川工業では1～4日間で実施されている。長いところで5日間、短いところではわずか1日間というように一様ではない。主として受け入れ企業・事業所側の事情によるところが大きいであろう。⑤インターンシップの学内運営については、各校それぞれ学内にインターンシップ実行委員会が組織され、委員会を中心に事業所の開拓、生徒への指導等、インターンシップ実施にともなう役割分担、校内調整がはかられている。⑥インターンシップ成功の鍵を握っているであろう事業所の開拓は、卒業生が採用されている企業だけでなく、地域に立地する企業にも依頼している。その際、大川工業と八女工業は地域の商工会議所を利用している点が若干異なっている。さらに、教員個人とのつながりの深い事業所が選ばれ

ていることである。インターンシップ発足間もない現時点では教員個人の開拓努力によるところが少なくない。⑦受け入れ事業所の開拓時期は八女工業のみ前年度の9月から始めており、他3校とは異なっている。⑧生徒のインターンシップ先事業所への割り振りは4校とも、生徒から希望を聴取した後に教員によって行われている。

具体例として三池工業におけるインターンシップの事例をみていく。表6は2001(平成13)年度三池工業のインターンシップ参加者のインターンシップ先事業所名、参加人数、期日、日数を見たものである。電子機械科13名、電気科12名、情報電子科6名、土木科6名、工業化学科7名、合計44名のインターンシップ参加の希望者に対して行われた。実施期間及び時期は夏季休業中のうち3日間ないし4日間であった。インターンシップ先事業所数は22社、受け入れ人数はほとんど1～2名程度に限られている。4名受け入れた企業はわずかに3社に過ぎなかった。

#### 4 生徒の反応

次にインターンシップに参加した生徒はそこで何を学び、何を考え、何を獲得したのか、あるいは獲得しなかったのか、生徒の反応を見よう。表7はインターンシップに参加した生徒の感想を記したものである。そこには、「積んだ荷が荷崩

表7 インターンシップ参加生徒の反応

工業高校名	参加生徒の反応
大川工業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事をするの大変さがわかった。</li> <li>・学校で一年半怒り慣れた先生から言われることよりも、違ったおじさんやおばさんから怒られるのも良い。</li> <li>・学校に無い新しい機械を見ることができて、良かった。</li> <li>・参加して本当に良かった。</li> <li>・将来の就職についてのイメージが沸いた。</li> </ul>
八女工業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・工場内での作業は初めてのことばかりでもしろかった。</li> <li>・朝から夕方までのスケジュールで仕事の大変さを身をもって感じる事が出来た。</li> <li>・学校では教わっていない技術を身につけることが出来た。</li> <li>・挨拶が出来るようになった。</li> <li>・これからの進路について自分なりに考えることができた。</li> <li>・とても眠たくとも我慢しなくてはならず、学校とは違う厳しい世界だった。</li> <li>・長さや種類も見分けられるようになり、次第に面白さを見つけてやるようになった。</li> <li>・積んだ荷が荷崩れを起こしたときはショックだった。どんな仕事でもトラブルはあって、その対処が大切だと感じた。</li> <li>・同じ失敗を繰り返さないことも重要であると感じた。</li> </ul>
三池工業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大切な仕事を行ったのに褒めてはもらえなかった。さみしかった。</li> <li>・この仕事は自分に合わないと思った。そのことに気付いただけでもインターンシップにきて良かった。</li> <li>・責任の重さを実感した。</li> <li>・学校で学んでいる機材は古く、この会社でも使われていなかった。そのことにより、授業へのやる気が減る一方である。</li> <li>・製品一つ作るまでにとっても労力が必要であるということを知った。</li> <li>・学校では習うことの無いことをたくさん知ることができた。</li> <li>・事業所内は授業で教わったものがたくさんあり勉強になった。</li> <li>・学校で学んでいるものは、実際の現場でのほんの一部であることを知った。</li> </ul>
田川工業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インターンシップに行く前は積極的ではないが、体験後は良かったと評価している。</li> <li>・企業のしくみに興味をもった。</li> </ul>

出所) 各工業高校提供資料及び聴取り調査により作成

れを起こしたときはショックだった。どんな仕事でもトラブルはあって、その対処が大切だと感じた。」(八女工業)、「同じ失敗を繰り返さないことも重要であると感じた。」(八女工業)とあるように体験して失敗したことから学んだことが記されている。

さらに、「学校で一年半怒り慣れた先生から言われることよりも、違ったおじさんやおばさんから怒られるのも良い。」(大川工業)、「学校にない新しい機械を見ることができて良かった。」(大川工業)、「学校では教わっていない技術を身につけることができた。」(八女工業)、「とても眠たくとも我慢しなくてはならず、学校とは違う厳しい世界だった。」(八女工業)、「学校では習うことがないことをたくさん知ることができた。」(三池工業)、「事業所内は授業で教わったものがたくさんあり勉強になった。」(三池工業)、「学校で学んでいるものは、実際の現場でのほんの一部であることを知った。」(三池工業)、「企業のしくみに興味をもった。」(田川工業)等々、このように事業所の先輩から学んだこと、学校とは違う厳しい世界を知ったことなど、学校生活では得ることのできない貴重な体験が記されていることに注目しなければならない。もっとも、「学校で学んでいる機材は古く、この会社でも使われていなかった。そ

のにより、授業へのやる気が減る一方である。」(三池工業)というような逆説的な感想を述べているケースもあるということも付け加えておこう。

しかしながら、「将来の就職についてのイメージが沸いた。」(大川工業)、「これからの進路について自分なりに考えることができた。」(八女工業)、「この仕事は自分には合わないと思った。そのことに気づいただけでもインターンシップにきて良かった。」(三池工業)などの意見に見られるように生徒の将来の職業選択に何らかの影響を与えていることがわかる。このようにみていくと、生徒のインターンシップに対する反応は極めて良好といえる。ただし、生徒自身、こうした感想文が企業にも提出されることを納得済みであることを考慮するならば、生徒の反応に対する評価は一部差し引いて考えざるをえないだろう。なお、表8に三池工業におけるインターンシップ参加生徒の感想の一部を示しておこう。

表8 インターンシップ参加生徒の感想

- 電子機械科 3年 K (有明技研株式会社)
  - ・NC加工の会社で、主にテレビやパソコンの半導体部品を作っている会社。
  - ・従業員の方が丁寧に指導してくれた。
  - ・従業員の方はおもしろい方ばかりだった。
  - ・いろんなことを学んだ。
- 電子機械科 3年 I (田中铁工株式会社)
  - ・発注間近の大切な仕事を任せ緊張した。
  - ・大切な仕事を行ったのに褒めてはもらえなかった。さみしかった。
  - ・この仕事は自分に合わないと思った。そのことに気付いただけでもインターンシップにきて良かった。
- 電子機械科 3年 I (近鉄エンジニアリング株式会社)
  - ・最初はぜんぜんインターンシップには行く気は無かったが、社会勉強と割り切り、渋々参加した。
  - ・主にパソコンを使っている製図を行った。
  - ・就職を希望していたが、今年の求人は昨年よりも減り、多少なりにもこのインターンシップが影響を与えたような気がして心配である。
  - ・責任の重さを実感した。
  - ・学校で学んでいる機材は古く、この会社でも使われていなかった。そのことにより、授業へのやる気が減る一方である。
- 電子機械科 3年 Y (第一紡績会社ーニット工場ー)
  - ・工場の臭いがかなり強烈だった。
  - ・製品が出来上がるまでの順路と、製品がどのように活用されているのかを知ることができた。
  - ・製品一つ作るまでにとっても労力が必要であるということを知った。
  - ・辛い環境の中での作業の大変さを知った反面、工場の中庭などに木が植えてあったりして、自然に囲まれた職場環境を提供されてあるのにも気付いた。
  - ・終わってみて、まあ、いい経験だったと思った。
- 電気科 3年 K (九州電力 大牟田電力所)
  - ・自分が想像していた実習とは少し違う印象を受けた。
  - ・現場での技術的な作業が多いと思っていたが、説明ばかりだった。
  - ・学校では習うことが無いことをたくさん知ることができた。
  - ・もう少し、現場に出て、いろいろな機械を扱ってみたかった。
  - ・このインターンシップを機会に九電に入社したいという意欲が高まった。
- 電気科 3年 N (九州電力 港発電所)
  - ・先輩がたくさんいて、いい職場だった。
  - ・事業所内は授業で教わったものがたくさんあり勉強になった。
  - ・学校で学んでいるものは、実際の現場でのほんの一部であることを知った。
  - ・仕事の厳しさや、職場の環境的配慮などについて学ぶことができた。
  - ・ここで学んだことをこれからの進路に役立てていきたい。
- 情報電子科 2年 I (三井三池製作所 原動機事業部)
  - ・最初、作業内容や会社の人との接し方にかなり不安だった。
  - ・パソコンを使っての表計算やCADを行った。
  - ・ロードヘッダーという、トンネルを掘る機械を作成していた。
  - ・学校と違い、たくさんの機械があった。
  - ・三日間を通しての実習はとても貴重な経験となった。
  - ・この経験を今後活かしていきたいと思う。
- 情報電子科 2年 T (三井三池製作所 情報システムセンター)
  - ・とても充実した3日間だった。
  - ・最初はかなり緊張していたが、会社の方の気配りでかなり緊張が癒された。
  - ・パソコンを使っての表計算やCADの作業を行った。
  - ・普通に何も無く高校生活を送っていたら体験できないことばかりを体験した。
  - ・インターンシップに参加してほんとうに良かったと思う。
- 土木科 3年 T (三井道路)
  - ・作業内容は学校での実習の復習であるように感じた。
  - ・厳しく教えてもらいたかったが、そうではなかった。
  - ・就業体験をするなら2年生にはまだ難しいと感じた。
  - ・働いている方は皆、優しかった。私が社会人になっても、このように人間の心を持って接することができる人になろうと思う。
- 工業化学科 2年 T (電気化学工業 分析・解析課)
  - ・最初はかなり不安だった。かなり緊張して実習に挑んだが、現場の人たちは皆やさしく安心した。
  - ・この会社はカーバイトを作っている会社で、実習の中身は普段学校で学んでいる内容のことが多かった。
  - ・5日間を通して、会社の中の作業の流れを一通り実習した。
  - ・とてもたくさんのお話を学べてよかった。

IV. インターンシップ受け入れ事業所の事例分析

1 企業概要

(1) A社の概要と職場組織

① A社の概要

A社は資本金2,373億円、従業員数14,191名、九州一円で事業展開している大手電力産業である。供給設備は水力発電所138ヶ所、火力発電所12ヶ所、地熱発電所5ヶ所、内燃力発電所39ヶ所、原子力発電所2ヶ所を有し、総電力量は19,336万キロワットにものぼる。販売電力量は年々増加の傾向にあり、2001(平成13)年度の販売電力量は753億2,000万キロワットとなっている。

電力の需要は益々増加の傾向にある反面、電気供給の自由化に伴う対策も進められており、電力市場における競争の本格化に対応するため、中期経営方針を固め、経営効率化を一層加速化させるとともに、電力の安定供給や地球環境問題などの

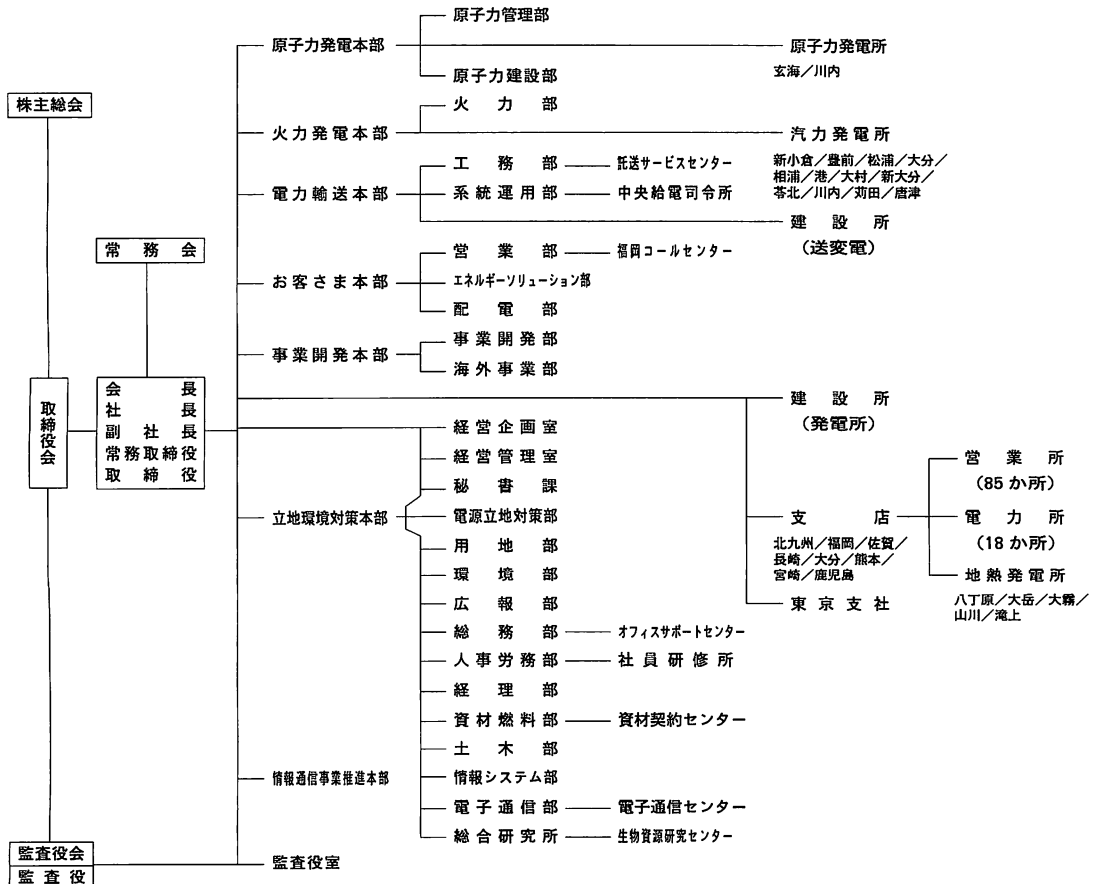
公益的課題の達成に取り組むなど、効率化と公益性の両立を図りつつ競争に勝ち抜いていく経営を進めている。こうした経営方針を受けて、設備投資、修繕費、諸経費等の削減、さらに人員の削減も図られている。2006(平成18)年度までに従業員数を12,500人までに減らす計画が進んでいる。

新卒者の動向については、2002(平成14)年度の実績では149名の採用だったのに対して、2003(平成15)年度は98名の採用であった。年々減少の傾向にあり、人員削減の推進は新卒者採用に大きく影響を与えている。高卒者の採用はさらに厳しく、2003(平成15)年度は採用無しという状況となっている。電力供給の自由化の波は電力産業の労働市場に少なからず影響を及ぼしている。

②A社の職場組織と作業内容

A社の職場組織は図1にみるとおりである。高

図1 A社 組織図



出所) A社提供資料

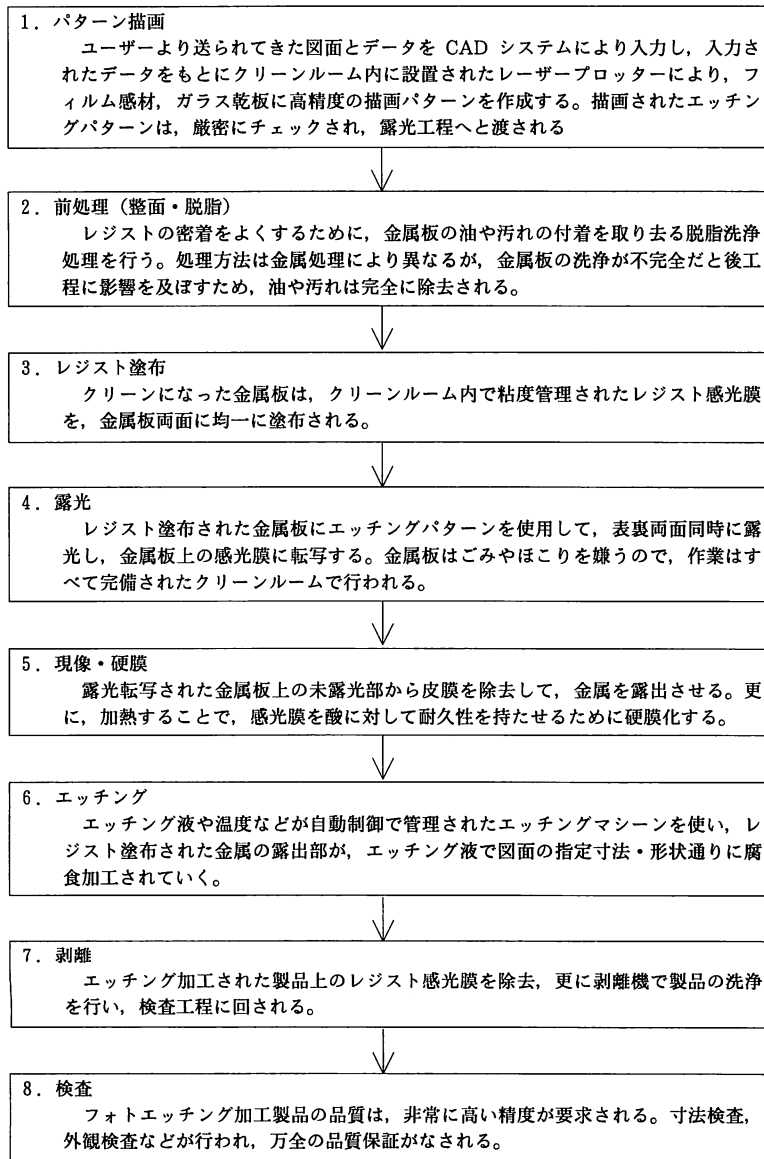


卒者と大卒者（短大，高専卒含む）とでは基本的に配属・勤務先が異なる。高卒者は支店採用であり，支店管轄内の各営業所，電力所に勤務する。一方，大卒者（短大，高専卒含む）は本社採用で九州全域の各支店に勤務することになる。

電力所と営業所における業務内容を見てみよう。まず両者の違いは，6万ボルト以上の電力を扱うところを電力所と言い，6万ボルト未満の電

力を扱うところを営業所と呼び区別している。従って電力所では6万ボルト以上の送電線や変電所の設置ならびに保守に関する業務が行われている。これらの仕事を工務系と呼んでいる。他方，営業所では営業と配電の2つの業務に分かれる。配電業務は6万ボルト未満，通常6千ボルト電力設備の建設・保守関係の作業を言い，電気利用者にもっとも近いところで仕事をしているのが配電

図2 B社エッチング製品の生産工程図



出所）B社提供資料及び聴取り調査により作成

課の職員である。営業課は言うまでもなく営業活動を行っている職員である。

## (2) B社の概要と生産工程

### ①B社の概要

B社は資本金1億0,199万円、従業員数350名、大阪に本社をもつ金属加工の製造企業である。主な製品には半導体のリードフレーム、エンコーダー、メタル製版用ステンシル、グリッドメッシュ、モーターコア、ガラスマスク、また金属板による装飾品の生産も行っている。事業内容はフォトエッチングという技術を使ったエッチング製品を製作している。フォトエッチングとは精密写真と写真腐食法を使ったエッチングであり、従来のプレス加工では不可能だった1,000分の1<sup>3</sup>り単位の世界に挑む高精度加工法である。B社ではIC、超LSIなど最先端のテクノロジーに開発研究の段階から参入しており、フォトエッチングという金属加工技術により、エレクトロニクス、精密機器、光通信の分野で広く活躍している。さらに、レーザー加工、ワイヤー加工、メッキ加工、機械加工と金属だけではなく、プラスチックやセラミックといった非金属の加工技術の分野にも着手している。

### ②B社熊本工場の生産工程

熊本工場は荒尾市に位置し、1989(平成元)年に開設された。従業員数は110名で、B社の全従業員数の約3分の1が在職している。熊本工場では主にフォトエッチングの技術を使ってのエッチング製品を製作している。

図2はエッチング製品の生産工程を示したもの

である。これらの工程における作業が一つの工場内で行われる。精密写真と写真腐食法の応用から生まれたこの技法は、プレス打ち抜き加工では不可能だった超高精密な要請にも対応し、エレクトロニクスに欠かせない極小極薄、そして複雑形状の製品の生産に相応しい技法とされている。

## (3) C社の概要と生産工程

### ①C社の概要

C社は、1961(昭和36)年松下電工(株)の住宅事業部として発足し、1963(昭和38)年に「ナショナル住宅建材株式会社」の社名で設立された。その後、2002(平成14)年社名変更して、現在に至っている。総従業員数は2002(平成14)年現在で650名である。本社は大阪に位置し、全国に33ヶ所に営業所を持ち、滋賀県、茨城県、静岡県、福岡県に工場を所有している。主な事業内容は「パナホーム」に代表される工業化住宅の各種部材の生産及び建築である。

### ②C社九州工場の生産工程

C社九州工場は福岡県三井郡に位置しており、1980(昭和55)年に操業を開始している。従業員数はスタッフ、総務、人事、計画、製造責任者に100名、工場の現場作業者に100名、全体で200名が働いている。なお、これ以外に80名の社外工がいることも付け加えておかなければならない。九州工場では、工業化住宅の各種部材が最新の生産ラインによって製造されている。

図3 C社の生産ラインの概要

#### [外壁ライン]

戸建て住宅の外壁を構成する大型パネルを生産。枠組みの構造から面材・内装ボード・断熱材の取り付け、塗装、サッシ・雨戸の取り付け加工のあと、顧客ごとの運送治具に装填し出荷する。

#### [鉄成形ライン]

外壁・床・屋根パネルの鉄枠フレームの生産ライン。コイル供給・孔あけの後、バイブレーション成型機によって形が整えられ、規定の寸法に切断される。

#### [屋根ライン]

パナホームに使用される大型屋根パネルを製造している。コンピューターが生産指示、生産品種の切り替え、釘打ち、ビス締め位置を設定する。

#### [木加工ライン]

生産部材に使用される木材を加工。水分調整を施した木材に、切断・穴あけ、仕上げなどの加工を施し、防蟻・防腐処理を行い耐久性を高める。

#### [床ライン]

セメントと強繊維を特殊結合させ、耐久性と遮音性が高い「PCC（ポリマー・セメント・コンポジット）板」という床材が製造される。この床材は顧客のプランに合わせて製造される。

[ボード塗装ライン]

外装基盤としているNTC（ニュー・テクノロジー・セラミックス）外装材の製造保持のために塗装を施すライン。温度・湿度が一定で安定した環境のもとで作業が行われるため、現場塗装よりも優れた性能を発揮する。

[化粧開口枠ライン]

ドア枠をオリジナルカラーで生産するライン。大板の巾切りから始まり、ドア枠の鴨居・敷居等の組み込み段階を経て、種類別にセット品として自動梱包され、出荷される。

出所) C社提供資料及び聴取り調査により作成

当社の主力製品である「パナホーム」は大型パネル構造の住宅であり、各部材を張り合わせることで、一戸建ての住宅となる。生産工程は各種部材によってわかれており、図3に示すように工場は7つの生産工程からなる。7つの生産ラインとは外壁ライン、鉄成形ライン、屋根ライン、木加工ライン、床ライン、ボード塗装ライン、化粧開口ラインである。この7つの生産ラインを通して各部材が組み立てられて、一戸建て住宅が完成する。

2 インターンシップの受け入れ状況と体験内容

(1) インターンシップ受け入れ人数

次に3社の事業所のインターンシップ受け入れ

状況を表9に示す。受け入れ開始時期はA社とB社が2000(平成12)年度、C社は2001(平成13)年度である。A社は、1965(昭和40)年代から高校生に限らず大学・短大・高専から受け入れている<sup>3)</sup>。2000(平成12)年度に大学、短大、高専生50名、工業高校生5名、2001(平成13)年度に大学、短大、高専生50名、工業高校生12名、2001(平成14)年度に大学、短大、高専生50名、工業高校生22名である。毎年50名の大学、短大、高専生がインターンシップに参加している一方で、工業高校生のインターンシップ参加数は5名(平成12年度)12名(平成13年度)22名(平成14年度)と確実に増加していることがわかる。

表9 調査対象事業所のインターンシップ受け入れ状況

社名	A社							B社		C社	
業種	電力産業							金属加工品製造業		住宅建材製造業	
インターンシップの受け入れ時期	高校は平成12年度 大学・短大・高専は昭和40年代							平成12年度		平成13年度	
インターンシップの受け入れ理由	①事業所による地域社会への貢献 ②事業内容のPR ③採用の関係深い学校への教育支援							①事業所による地域社会への貢献 ②採用の関係深い学校への教育支援 ③事業内容のPR		①事業所による地域社会への貢献 ②採用の関係深い学校への教育支援	
受け入れ学校名	大学・短大・高専	A工校	B工校	C工校	D工校	E工校	F工校	三池工業	玉名工業	八女工業	浮羽工業
受け入れ人数											
平成12年度	50名	2名	3名						3名		
平成13年度	50名	3名	6名	3名				2名	5名	2名	4名
平成14年度	50名	1名	3名		10名	5名	3名		4名	2名	
受け入れ期日	大学・短大・高専	A工校	B工校	C工校	D工校	E工校	F工校	三池工業	玉名工業	八女工業	浮羽工業
平成12年度	夏季休業中 3日～10日間	7/24-26	7/24-26						未調査		
平成13年度	夏季休業中 3日～10日間	8/22-24	8/27-29	8/2-6				7/23-25	11/12-16	8/2-8	7/2-4
平成14年度	夏季休業中 3日～10日間	7/24-26	8/21-23		5/29-31	7/22-25	8/22-28		11/11-15	8/22-28	
受け入れ学科	理工系の学校	電気科	電気科	電気科	電気科	電気科	電気科	電子機械科	機械科、電子科 電気科	情報技術科、電気科	建築科
受け入れ態勢	全般的な管理は本社、人事労務部の部長が行う。また、高校生の受け入れについては各営業所の所長が管理を行っている。現場体験では、各部署における現場責任者が生徒の引率や設備の説明を行っている。							生産管理課課長と各生産工程の責任者が指導にあたる。		管理責任者として、経営管理課課長、係長、班長がそれぞれ生徒一人に対し一人ずつ担当に付く。現場での指導責任者は、受け入れ部署の職長が受け持ち、生徒一人に対しそれぞれの職長が一人ずつ指導にあたる。	
体験内容	事業所設備の見学および説明。							製品の製作を行いながら生産工程に沿って実習をする。		製造ラインの末端で梱包や荷揃えといった簡単な軽作業を行う。	

出所) 各事業所提供資料及び聴取り調査により作成

表 10 A社の夏季実習生部門別受け入れ状況

受入部門	受入機関	人数
火力	新小倉発電所	4
	松浦発電所	2
	荅北発電所	2
	火力計	8
工務	北九州支店総合制御所	2
	北九州支店飯塚電力所	2
	福岡支店総合制御所	3
	福岡支店大牟田電力所	3
	佐賀支店総合制御所	3
	長崎支店総合制御所	3
	長崎支店佐世保電力所	3
	大分支店総合制御所	2
	大分支店日田電力所	2
	熊本支店総合制御所	3
	熊本支店八代電力所	2
	宮崎支店総合制御所	1
	宮崎支店日向電力所	2
	鹿児島支店総合制御所	3
	鹿児島支店川内電力所	2
	鹿児島支店鹿屋電力所	2
	工務計	38
総研	総合研究所〔生物資源研究センター〕	1
	総研計	1
土木	荅北発電所建設所	1
	小丸川発電所建設所	2
	土木計	3
総計		50

出所) A社提供資料

表 11 A社の夏季実習生の学歴、学校、学科別受け入れ状況

学歴	学校名	学科	人数
大学	鹿児島大学	電気電子工	1
	琉球大学	機械システム	1
		電気電子工	1
	佐賀大学	機械システム	1
	日本大学	電気工学	1
	広島大学	機械	1
	福岡大学	土木工学	1
		機械工学	1
		電気工学	2
	福岡大学院	電気工学	1
	熊本大学	電気システム	4
	九州大学	エネルギー科学	2
		建設都市	1
	九州工業大学	情報科学	1
	近畿大学	生物環境科学	1
		大学計	20
高専	有明高専	物質工学	1
		機械工学	1
		電気工学	3
		電子情報	2
	佐世保高専	電気工学	4
		機械工学	1
		電子制御工	1
	八代高専	土木建築工	1
	大分高専	電気工学	3
		制御情報工	2
	都城高専	機械工学	1
		電気工学	5
	福島高専	電気工学	1
	熊本電波高専	情報通信工	1
	電子工学	1	
	電子制御工	1	
久留米高専	電気	1	
	高専計	30	
総計		50	

出所) A社提供資料

表 12 A社の高校生夏季実習の受け入れ状況

年度	学校	受入機関		受入人員	実務業務
2000(平成12)年	A工業高校	7/24~26	3日間	2名	配電
	B工業高校	7/24~26	3日間	3名	送電・変電・通信
2001(平成13)年	A工業高校	8/22~24	3日間	3名	配電
	C工業高校	8/6~10	5日間	3名	配電
	B工業高校	8/27~29	3日間	6名	送電・変電・通信
2002(平成14)年	D工業高校	5/29~31	3日間	4名	配電
	D工業高校	5/29~31	3日間	2名	配電
	D工業高校	5/29~31	3日間	4名	配電
	A工業高校	7/24~26	3日間	1名	配電
	E工業高校	7/22~25	4日間	3名	送電・変電・通信
	E工業高校	7/22~25	4日間	2名	送電・変電・通信
	B工業高校	8/21~23	3日間	3名	配電
	F工業高校	8/22~28	3日間	3名	配電

出所) A社提供資料

さらに、A社の夏季実習生の受け入れ状況を詳しくみたものが表10、表11、表12である。表10は部門別にみたものであり、表11は学歴、学校、学科別にみたものである。大学、短大、高専生の場合、部門別には「工務」部門に約8割弱を受け入れている。同様に学歴別にみた受け入れ状況は大学が4割、高専が6割を占めている。さらに表12は高校生の受け入れ状況である。

B社、C社ではA社と異なり、近隣の工業高校からのみ受け入れている。B社では2校から3名（平成12年度）、7名（平成13年度）、4名（平成14年度）であり、C社では2校から6名（平成13年度）、2名（平成14年度）を受け入れている。

## (2) 体験内容

インターンシップを受け入れている理由はいずれの企業においても、「事業所による地域社会への貢献」と「採用の関係深い学校への教育支援」を挙げている。「事業内容のPR」は1社を除く2社が挙げている。受け入れ学科を見れば、A社とB社では事業内容に関連の深い学科の生徒を受け入れているのに対して、C社は事業内容とは必ずしも一致しない学科の生徒も含まれている。しかしながら、事業所側はインターンシップとし

てひとたび生徒を受け入れると、生徒の所属学科、専門性の如何にかかわらず、生徒のために専属の従業員を配置して面倒をみている。実習内容は三者三様で実にバラエティに富んだ内容となっている。

### ①A社の場合

表13はA社のある営業所の配電課に配属された生徒の作業工程書である。これによって5日間にわたるインターンシップの実習内容を探ってみよう。午前と午後に分かれたスケジュールが組まれている。

初日は所長挨拶の後に、企業側から会社や事業所、総務や営業の業務概要の説明が行われる。さらには原子力、負荷平準化、電力の自由化などについての説明を受ける。2日目になると配電設計業務、総合オンラインシステム、特殊設備設計の説明を受ける。その後、現場調査体験が行われる。ここでいう現場調査とは、新築した家などに電気を引く場合、どのようにして電線をひくのか、実際に現地に行って視察したり、電線、電柱などの設備が痛んでいる箇所がないかどうか直接見て回る、いわゆる巡視と言われる作業のことをいう。したがって、現場調査体験はそれらの調査に同行することを意味している。3日目になると

表13 A社高校生夏季実習生の作業工程書

(営業所の配電課)		
8月22日(木)	午前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・所長挨拶および実習生紹介</li> <li>・会社および事業所概要説明</li> <li>・総務業務概要説明</li> </ul>
	午後	<ul style="list-style-type: none"> <li>・営業業務概要説明</li> <li>・原子力PA</li> <li>・負荷平準化について</li> <li>・自由化について</li> </ul>
8月23日(金)	午前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・配電設計業務概要説明</li> <li>・総合オンラインシステム説明</li> </ul>
	午後	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特殊設備設計説明</li> <li>・現場調査体験</li> </ul>
8月26日(月)	午前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・配電管理業務概要説明</li> <li>・八女の地域特性について</li> </ul>
	午後	<ul style="list-style-type: none"> <li>・配電長期計画について</li> </ul>
8月27日(火)	午前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・配電制御業務概要説明</li> <li>・電算機説明</li> </ul>
	午後	<ul style="list-style-type: none"> <li>・防霜ファン対策説明</li> <li>・配電事故処理等説明</li> </ul>
8月28日(水)	午前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・配電運用業務概要説明</li> <li>・特殊車両取り扱い説明</li> </ul>
	午後	<ul style="list-style-type: none"> <li>・間接工具取り扱い説明</li> </ul>

出所) A社提供資料

表 14 A 社大学・短大・高専学生 夏季実習生の作業工程書

実施時期		研修項目		(変電所) 講師
日	曜日			
8月5日	月	午前	・開催挨拶〔課長〕 ・九州電力の概要 ・九州の電力系統と需給バランスについて	変電課
		午後	・長崎支店管内の系統について ・佐世保SS設備見学 ・その他	
8月6日	火	午前	・変電課の日勤業務	変電課
		午後	・変電課の当直業務 電圧潮流監視, 給電DP取り扱い, ITV取り扱い, 訓練シュミレーター取り扱い	
8月7日	水	午前	・木風sws〔GIS〕設備見学 ・東佐世保ss〔22kV系統ss〕設備見学	変電課
		午後	・早岐ss〔半屋内配線用ss〕設備見学 ・針尾ss〔環境調和型全屋内配電用ss〕設備見学	
8月8日	木	午前	・発電の種類とコスト, 環境への影響など ・原子力発電について	変電課
		午後	・変電課計算機システムについて ・九州電力の通信設備について	
8月9日	金	午前	・九州電力の送電設備について	送電課
		午後	・佐世保営業所設備見学〔司令室他〕 ・懇親会	

出所) A社提供資料

再び配電管理業務, 八女の地域特性, 配電長期計画などの説明を受ける。4日目は配電制御業務をはじめ, 電算機, 防霜ファン対策, 配電事故処理などの説明が行われる。配電制御業務とは電線の切断による配電線のトラブルが発生した場合, 別ルートから電気を廻す設備の制御に関する業務をいう。最終日の5日目になると配電運用業務, 特殊車両そして間接工具の取り扱いについての説明を受ける。

このようにインターンシップとして行われる体験実習は現場調査体験を除いて, 基本的に営業, 配電設計, 配電管理, 配電制御, 配電運用の各業務の概要説明が中心であり, そうした業務遂行に欠かせない設備, 機器の取り扱い, 用語の理解等が求められる。現場調査体験をする以外にA社の日々の業務内容に生徒自身が携わることはない。A社におけるインターンシップの実習内容は配電関係業務の概要説明に終始しているとはいえ, 説明内容それ自体高度な専門性が求められていることも事実であり, 受け入れ学科は工業高校電気科の生徒に限定されている。

次に, 大学・短大・高専のインターンシップ実

習生の作業内容のみておこう。表14は変電所に配属された場合の実習スケジュールである。大学・短大・高専学生の夏季実習生の受け入れは工務系といわれる火力発電所, 電力所, 制御所, 総合研究センター, 発電所建設所などの部署であり, 6万ボルト以上の高電圧を取り扱う設備のもとでの実習が行われる。高校生の実習に比べて幾分専門性の高さが要求される内容であるが, ここでも設備の概要説明と, 日常の業務内容の説明に多くの時間が割かれていることがわかる。

## ② B社の場合

表15はB社のインターンシップ参加生徒のために作成された研修スケジュールである。

1日目はオリエンテーションに始まり, 会社の概要や職場のきまりについてビデオ視聴する。オリエンテーションでは「仕事に対する心構え」「社会的態度のあり方」について熊本事業所長による講話が行われる。ビデオ講座では生産管理課長を講師として, 品質や職場の安全についての知識や職場のルールなど自社の社員研修用に作成されたビデオを使って研修が行われる。生産管理課長は次のように述べている。

表 15 B社のインターンシップスケジュール

	第1日 11月11日(月)	第2日 11月12日(火)	第3日 11月13日(水)	第4日 11月14日(木)	第5日 11月15日(金)
8:30	オリエンテーション	現場実習 材料洗浄	現場実習 現像	現場実習 現像	現場実習 検査・出荷
10:00	ビデオ講座 「よい製品を作る」				
	休憩	休憩	休憩	休憩	休憩
10:15	ビデオ講座 「安全こそ全ての基本」	現場実習 レジスト	現場実習 現像	現場実習 現像	現場実習 排水処理
12:00	ビデオ講座 「職場の決まりを守る」				
	昼食	昼食	昼食	昼食	昼食
13:00	工程説明 工程の概要	現場実習 焼付	現場実習 現像	現場実習 エッチング	現場実習 保全
15:00					
	休憩	休憩	休憩	休憩	休憩
15:15	工場見学	現場実習 現像	現場実習 現像	現場実習 剥離	まとめ
17:00					

出所) B社提供資料

「製品は折れ曲がったりしますので、最初ビデオの中で品質とか出来映えとか勉強させます。それを通してものづくりに対してどれだけの配慮をしていかなければならないか、といったことを学べるのではないかと思います。」(B社聴取り調査)

引き続き午後には、生産管理課長の引率の下、B社の生産工程の概要説明と工場見学が行われる。2日目から現場実習が行われる。とはいえ、生徒は実際の生産ラインに入るわけではないし、主力製品である半導体リードフレームの製作に関わることもない。ここで言う現場実習とはB社の主要技術であるフォトリソ技術を使ったPR用のカレンダーの製作をすることが計画されている。作品の製作を通して、事業所で行われている生産工程を一通り体験することが意図されているのである。作品は40枚一組の名刺サイズの大きさのもので、完成後は生徒が持ち帰ることになる。

2日目の現場実習は材料洗浄から始まって、レジスト、焼付、現像へと作業工程に沿って行われる。生徒が作る作品PR用カレンダーの下絵は既にB社側で準備されている。そしてレジスト塗布されたステンレスシートに下絵をプリントして、露光機で焼付をする。その後焼付された製品が現像工程に運ばれる。2日目の作業はここで終わる。

「ものを作る上で、質の中身が重要です。我が社では金属材料がほとんどなんです、銅とかステンレスとか。まず、洗浄して、脱臭して汚れとか油分をとります。レジストというのはエッチングするための耐酸性塗膜を貼るんですよ。そのコーティングの作業を実際やってみます。」(B社聴取り調査)

「焼付工程では図柄を露光機という機械で焼き付けます。で、現像して、エッチングされて残るものがこの図柄になります。焼き付けで残るものと、残らないものとに分けるということになります。」(B社聴取り調査)

3日目は丸一日間かけて現像の仕事を行う。しかし、3日目になると自分の製品の製作を行うかたわら、実際の現像の生産ラインに入って体験実習を行うことになる。

「作業的に、一般の作業として研修しやすいかなと思って、ここで(現像)1日おいています。他の部署は非常に熟練がいるわけです。これ(現像)だったら、作業しながらでもお手伝い程度はできるかなと考えています。」(B社聴取り調査)

上述の聴取りで述べているように、現像工程は他の工程に比べて熟練度をそれほど必要とせず、比較的初心者でも可能であるからである。実際、生徒が体験することは現像された製品(シート)を乾燥させる作業である。確かにそれほど熟練度

表 16 浮羽工業高校生徒のインターンシップ受け入れスケジュール

7月2日(月)

時間	内容	場所	担当
8:30~	事前打ち合わせ・諸注意	管理棟2F事務所	山田
9:00~ 16:55	現場責任者引渡し 現場実習 (製造) ①鶴田 ②藪方 ③内野 (資材管理) ④村山	管理棟2F事務所 現場	岡田CM 宮野CM
16:55	終了挨拶	管理棟2F事務所	山田

7月3日(火)

時間	内容	場所	担当
8:30~ 16:55	現場実習 (朝会にも参加)	現場	製造・現品確認者
16:55	終了挨拶	管理棟2F事務所	山田

7月4日(水)

時間	内容	場所	担当
8:30~ 16:55	現場実習 (朝会にも参加)	現場	製造・現品確認者
16:55	終了挨拶	管理棟2F事務所	山田

出所) C社提供資料

表 17 八女工業高校生徒のインターンシップ受け入れスケジュール

8月22日(木)

時間	内容	場所	担当
8:00~	事前打ち合わせ・諸注意	管理棟2F事務所	山田
8:25~ 17:15	現場責任者引渡し 現場実習 配属先: 第一製造課	現場	野間
17:20	終了挨拶	管理棟2F事務所	山田

8月23日(金)~27日(火)

時間	内容	場所	担当
8:30~ 17:15	現場実習 (朝会にも参加)	現場	製造確認者
17:20	終了挨拶	管理棟2F事務所	山田

8月28日(水)

時間	内容	場所	担当
8:30~ 17:15	現場実習 (朝会にも参加)	現場	製造・現品確認者
17:20	終了挨拶	管理棟2F事務所	山田

出所) C社提供資料

は要しないけれども、生産ライン上の製品を扱うため慎重な作業が求められることはいうまでもない。

4日目になると、生徒自身の作品製作が続けられる。午前中の現像作業が終わると午後はエッチング作業、剥離作業を実習する。エッチング工程は現像した製品(シート)をエッチング溶液に溶かし、焼き付けた箇所を除去する作業である。剥離工程はエッチングした後に製品を剥離機に送っ

て洗浄を行う作業である。これらの作業は機械によって行われるため、実際の機械の操作はB社従業員が行うことになる。

最終日には製品検査と出荷業務、排水、保全についての説明を受ける。製品検査は外觀検査や寸法検査が検査機械によって行われるが、生徒は検査の仕方、検査機械の扱い方の説明を受けた後、自分で製作した作品の検査を実際に体験する。さらに出荷現場では製品がどのように管理され、ど



のように出荷されているのか説明を受けるとともに、梱包作業も体験する。その他、排水処理や保全業務の説明、見学がある。

「工場はものを作る上で、いろんな排水もありますよね、そういう工場の設備についての勉強をします。排水処理とか、保全関係の設備も説明し、製造に関する部署を期間は短いですけど、一通り見てもらうようにしています。」(B社聴取り調査)

以上のように、B社のインターンシップの体験実習は、自分の製品を作りながら全工程を一通り体験するという濃密な内容で構成されていることにその特徴を見いだせる。B社のインターンシップ受け入れ担当責任者であり、体験実習プログラムの作成者でもある生産管理課長はインターンシップに対する思いを次のように述べている。

「サービス業とかでしたら、それだけの仕事というのがありますけど、製造業はある部署だけにいても自分は何をしているのかわからないですよ。ましてや学生時代は好奇心もありますし、一つの場所では退屈すると思ひましてね。できるだけ工程をまわして、そして自分たちがやったことが確認できるようになれば、実習として充実すると思っています。」(B社聴取り調査)

### ③C社の場合

次の二つの表はC社のインターンシップ実習生の受け入れスケジュールである。表16は浮羽工業生徒用、表17は八女工業生徒用である。

2001(平成13)年度に受け入れた浮羽工業実習生は4名、7月2日から4日の3日間の日程であった。4名の配置先は製造課と資材管理課である。1日の実習時間は3日間とも8時30分の朝会から始まり、16時55分で終了する。一方、八女工業の場合、受け入れ人数は2名で8月22日から28日まで、土日を除く5日間行われている。配属先は第1製造課である。浮羽工業生徒と八女工業生徒のいずれもインターンシップにおける体験実習は同じ内容であったし、配属先が違っていても基本的に同じ業務であった。

C社におけるインターンシップ実習生の作業内容は基本的に軽作業に限られている。C社の重作業とは外壁組立ラインで外壁を作る作業をいう。外壁組立ラインの作業といってもパテ塗りや窓の取り付けなど比較的単純な作業ではあるが、大きな部材を扱っているため危険を伴う仕事である。従って実習生の行う作業は、アルミ加工ラインや小さな部材を梱包する梱包ラインでの簡単な作業

であった。

「重作業はやらせられないんですよ、怖いですから、怪我が。危ないところにはやらせられないので、どうしても軽作業になるんですよ、梱包であったり、荷揃えだったりとかね。」(C社聴取り調査)

上記、聴取りに述べられているように、実習生は製品の梱包や荷揃えに従事しているのである。具体的には、完成した製品を段ボールやビニールで包装して、テープや製品ラベルを貼る梱包作業であったり、生産ラインから流れてきたアルミ部材などを搬送しやすいように一定の大きさ毎に並べる荷揃え業務なのである。このように、インターンシップ実習生の行う作業は概して単純な手作業を行っているのである。

### 3 生徒の反応

それぞれ実施形態の異なる3社のインターンシップに参加した生徒の感想を見てみよう。A社のインターンシップに参加した生徒の場合、「自分が想像していた実習とは少し違う印象を受けた」「現場での技術的な作業が多いと思っていたが、説明ばかりだった」というように、説明を受けるばかりではなく現場作業に従事することを望む意見が見られた。さらに、「学校で学んでいるものは、実際の現場でのほんの一部であることを知った」など、職場で体験することによって学校で学ぶ内容を捉え直す意見も散見された。

次にB社では、「ものを作る仕事の大切さ(品質、納期、価格)について教わった」「現場作業の工夫なども学んだ」というように、もの作りから学んだ点を指摘している感想が多い。さらに、「学校と会社は違うという点、学生と社会人は違うという点について会社の人から教わった」など、従業員から学んだことも記している。

最後にC社での感想は、「積んだ荷が荷崩れを起こしたときはショックだった」「どんな仕事でもトラブルはあって、その対処が大切だと感じた」など、学校では得られない貴重な体験を記している。

このように生徒の感想は、各企業・事業所で生徒自身が従事した内容に違いはあっても、それぞれの現場で実に多くのことを学んでいることがわかる。

### 4 事業所が見るインターンシップ

インターンシップ受け入れ事業所は、インターンシップをどのようにみているのだろうか。3社

共通の意見として第1に、インターンシップを受け入れることは事業所の社会貢献の一環だという理解をしていることである。もっとも、この点については企業の表向きのポーズとして額面どおり受け取ることができないとする立場もあろう。第2に、企業・事業所の宣伝効果に有益だとする考え方があろう。例えば、B社に見られたように、インターンシップの体験実習で生徒が作成したB社のPR用カレンダーは名刺サイズで40枚ほどあり、最終的には生徒が持ち帰ることになる。生徒や保護者に配布することで会社のPRになるという。第3に、採用で世話になっている学校への協力関係の維持に不可欠だとする意見もある。しかし、第4に、多くの企業においてインターンシップを生徒の採用や求人との関連づけはしていない。第5に、インターンシップ受け入れ企業の担当責任者にとって、実習生の体験作業計画の作成や彼らの世話に大きな負担感を抱いていること等である。とくに、安全への配慮はことのほか受け入れ事業所にとって最大且つ困難な課題を突きつけている。

以上が最大公約数的な見方と思われるが、他方、生徒を受け入れることにより、「職場の活性化」や「生徒から従業員が学ぶこともある」と積極的に評価するケースもある。逆に、「インターンシップ実施中、学校は生徒に対して注意不足である。」「実習生に積極性や元気がない。」というような批判的な意見も見られる。

## V. おわりに

以上のように、インターンシップについて学校側の導入事例と企業・事業所側の受け入れ事例の展開状況を分析してきたが、最後にインターンシップの今日の特徴について一定のまとめをしておく。

第1に、インターンシップ参加生徒は学校では学ぶことのできない、働くことの意味を実感していることである。もっとも、この点についてはインターンシップの体験内容によって異なるであろう。第2に、学校と事業所のいずれも、表向きはインターンシップと就職活動を切り離して捉えているが、学校の対応や生徒の行動によって多少なりの影響を及ぼすと意識している。第3に、インターンシップは学校と事業所による献身的な「教育の連携」として位置づけられているが、そこでは学校側の「地域社会による学校評価」や「求人、採用に対する事業所へのアピール」などの思いや、事業所側の「従業員に及ぼす教育的効果」

や「宣伝効果」「地域評価」などの思いが複雑に絡み合っている。第4に、学校と事業所のいずれも、生徒の安全対策面への配慮に大きな負担を背負っており、特に事業所は事故時の責任問題を強く意識している。

このような今日の特徴が、インターンシップ受け入れ事業所の認識や取り組み方の温度差となっていると考えられる。インターンシップが定着するためにはインターンシップを取り巻く学校、事業所、地域、行政、それらの連携と協力体制を一層深め、学校と事業所に偏っている負担を分散・縮小するとともに、公的関与によるインターンシップの具体的な枠組みを確立することが求められる。

## 注

- 1) 普通科在籍者数と職業科在籍者数の比率はほぼ7.5:2.5と圧倒的に普通科在籍者数が多い。
- 2) この種の学習形態の呼び方は就業体験、体験学習、インターンシップというようにバラバラであり、文部科学省内においても統一した用語は使われていない。
- 3) A社ではインターンシップと呼んではおらず、夏季実習生という名称を使用している。

## 参考文献

- 1) 文部省『インターンシップ・ガイドブックーインターンシップの円滑な導入と運用のためにー』ぎょうせい、平成12年2月
- 2) 古閑博美編『インターンシップー職業教育の理論と実践ー』学文社、平成13年6月
- 3) 北海道大学大学院教育学研究科公教育システム研究会『公教育システム研究』創刊号、平成13年7月
- 4) 寺田盛紀『ドイツの職業教育・労働教育ーインターンシップ教育の1つの源流ー』大学教育出版、平成13年11月
- 5) 高校・大学インターンシップ研究会『高校・大学・企業におけるインターンシップの展開と課題』カシオ科学振興財団第17回研究助成報告書、平成13年12月
- 6) 寺田盛紀編『中・高等教育における「インターンシップ」ー職業・専門教育と雇用・就職の関連構造に関する日・独・中比較研究（国際共同研究中間報告書）ー』平成14年3月